

## アウグスティヌスにおける神の知り方 について

—Soliloq. I, cc. 2—5.—

山 田 晶

アウグスティヌスは『ソリロキア』の始め〔第1巻2章7節〕において、「汝は何を欲するか」と問う「理性」に対し、「神と魂とを知らんと欲す」*Deum et animam scire cupio.* と答えている。これは全生涯にわたる彼の探究の動機を端的に表現することばとして有名である。しかしここで問題となるのは、「神を知る」というとき彼はいかなる「知り方」を意味しているかということである。この点をあきらかにすることは、彼の神学の性格を理解するために重要であろう。事実『ソリロキア』においても、上記の「アウグスティヌス」の答に対し、「理性」はただちにこの問題を提起している。私は以下に「理性」と「アウグスティヌス」との対話に即しながら、この問題について考えてみたいと思う。

\* 以下の叙述において『ソリロキア』のなかに「理性」の対話者としてあらわれるアウグスティヌスを括弧に入れて表記し、そうでない一般の場合と区別する。

### 1

理 では探究を始めたまえ。まず最初に説明してくれないか。どのような仕方て神が君に示されたら、君は「十分です」ということができるかを。  
〔第2章7節〕

「アウグスティヌス」が「神と魂とを知らんと欲す」というとき彼が求めている神の知の根本的性格が、この「理性」の問いのうちに既にあらわれている。すなわち彼は自分に対して神が *demonstrare* されることを欲

している。それも中途半端な程度においてではなく「十分です」といわれうる程度に完全に *demonstrare* されることを欲している。ここで問われているのは、いわゆる神の存在論証としての *demonstratio* ではない。どのような仕方で神の存在が論証されたら満足かが問われているのではない。たとえいかに巧妙に神の存在が論証されたとしても、それだけでは人は満足しない。却って反対に、神の存在が確認されたならば、人はその存在する神を知りたいと熱望するに到るであろう。「神と魂とを知らんと欲す」というとき彼は、まさにそのような神の知を求めているのである。その熱望に対して「理性」が、どのように神が *demonstrare* されたら満足かと問うとき、この *demonstrare* とは神が御自身を彼の前にあらわし、神をまのあたりに見た彼が、主よ、十分です、これ以上にあなたを見たいとは望みませんと叫ぶほどに十分に神を見ることを意味しているのである。そのような仕方で神を知るのはいかなる知り方によるのであるかと「理性」はたずねる。

## 2

ア 「十分です」ということができるために、どのような仕方で神が私に示されたらよいか、私にも分かりません。いま神を知りたいと熱望しているその同じ知り方で私が何かを知っているとは思われませんかから。

理 ではどうしたらよいだらう。どのように神を知ったら十分であるかを、まずもって知るべきであるとは考えないか。

ア たしかにそう考えます。しかしどうしたらそれができるか分かりません。それを理解しているような仕方で神を理解したいと思うということのできるような何か神に似たものを、これまでに理解したことがありませんから。

理 まだ神を知らないのに、何か神に似たものを知らないで、どうしていうことができるのだ。〔第2章7節〕

「どのような仕方で神が知られたら十分か」という「理性」の問いに対して彼は「知らない」と答えている。たしかに彼は神を知りたいと熱望している。しかしその知り方を問われると知らない。なぜならその知り方に比較できるようないかなる知り方をも知らないからである。彼はさまざまなものを、さまざまな仕方で知っている。しかし、いま、「神を知りたい」というとき、その知り方はそれらの知り方のいずれでもない。だから「どのような仕方で神を知りたいか」と問われると、「知らない」と答えるほかはない。だがもし全然知らないならば、「神を知りたい」ともいえず、「その知り方は他のいずれの知り方とも異なる」ともいえない筈である。それゆえこれから探究をすすめてゆくためには、何よりもまず第一に、いま求められている神の知の「知り方」そのものが何らかの仕方で知らなければならない。彼もそのことは認める。しかし依然としてそのような知り方は知らないと主張する。なぜならそのものを知っているその知り方で神を知りたいということのできるような「神に似たもの」*Deo simile* をまだ何も知らないからである。これに対して「理性」は鋭く反問する。まだ神を知らないのに「神に似たもの」を知らないとどうしていえるのか、と。

この最初の「理性」と「アウグスティヌス」とのやりとりは、以下に展開される探究の方法を根本的に規定している。彼が知ることを求めている神は彼にとって未知なる者であり、のみならずその知り方すらもまだ知られていない。その意味において彼が「知らない」というのは正しい。しかしながら、もし全然知らないとすれば、探究そのものが成立たない筈である。だから「神を知りたい」というとき、その神は既に何らかの仕方で知られており、同時にその「知り方」も何らかの仕方で知られているのでなければならない。ただしその知はただ神のみにかかわるものではありえない。われわれは既にこの世界の中でさまざまなものをさまざまな仕方で知っている。求める神の知り方は、われわれが既に有しているそれらの知り方と、全く同一ではないにしても何らかの類似性を有しているのでなけれ

ばならない。われわれの探求はそれゆえ、その類似性を手がかりとしなければならぬ。だがそのような類似性は存在するであろうか。存在するとすればそれはいかなるものであろうか。

## 3

ア もし何か神に似た者を知っているとすれば、疑いなく私はそれを愛する筈です。ところがいま私は、神と魂以外の何者をも愛しません。しかもこの神も魂も私はまだ知らないのです。〔第2章7節〕

まだ神を知らないのに、「神に似たもの」を知らないとどうしていえるのか、という「理性」の問いに対して彼は答える。もし自分が神に似たものを知っているとすれば、私はそれを愛する筈である。しかるに私は神に似たものを愛していない。なぜならいま私の愛するのは神と魂だけであって、他の何者でもないからである。したがってそれ以外の「神に似たもの」も愛しない。それゆえ私は「神に似たもの」を知らない。——この推論のもとには、知はかならず愛をともなう、逆に愛がなければ知もないということが前提されている。では愛があれば必ず知があるかといえば、それはいえない。彼は神と魂とを愛している、しかし神も魂もまだ知らないといっているのである。しかしこれに対しては、全然知らないものをどうして愛することができるか、神と魂とを愛するという彼は、既に何らかの仕方で神を知っているのではないかという疑問がひきおこされるであろう。

この疑問に答えるために、われわれは知と愛との関係を二つに区別しなければならない。たしかに何かを知ることにはその知られたものに対する愛がともなう。知に随伴する愛 *amor concomitans* がある。しかしまた、知に先行する愛 *amor antecedens* がある。この愛が神探究の原動力となっている。彼は「神と魂とを知らんと欲す」といった。知らんと欲するのは、まだ知らない *nondum scio.* からである。しかし知らんと欲するのはそれを愛するからである。この場合の愛は知に先行する愛である。しかし

この愛はまだ求める知を完全に所有していない。その限りにおいて彼は、その愛する神をまだ知らないというのである。

神についての知は神への愛を前提する。神への愛によって神の知が生ずる。このようにして生じた知には神への愛が必ずともなう。かくて神の知は、いわば先行する愛と随伴する愛とによって包まれる筈である。かくて、いま求められている神の知り方についてわれわれは、愛との関係において次の性格をとらえることができる。神は愛によってその知を促され、愛によって知られ、その知があらたなる神への愛を生むようなそういう知り方によって知られる。

## 4

理 では君は友人を愛さないのか。

ア 魂を愛する私が、どうして友人を愛さないでおられましょう。

理 ではそれと同じ仕方で君は蚤や虱を愛するのか。

ア 魂を愛すると私は申しました。けれども生物を愛するとはいいませんでした。

理 だとすると、君の友人は人間ではないのか、それとも君は友人を愛さないかだ。すべての人間は生物である。ところがいま君は生物を愛さないといったのだから。

ア 彼らは人間ですよ。そして私は彼らを愛します。それは彼らが生物だからではなく、まさに人間だからです。つまり理性的魂をもっているからです。この理性的魂を私は、たとえ盗賊のそれでも愛するのです。〔第2章7節〕

「アウグスティヌス」は、私が愛するのは神と魂だけだ、それ以外のものは愛しないと答えた。それを受けて「理性」は、「では汝は友人を愛さないのか」とたずねる。これに対して彼は「愛する」と答えている。この答は前からの脈絡においてはおかしいように思われる。彼はいま、神と魂

とを愛し、他の何物をも愛さないといったばかりである。ところで友人は神でも魂でもない。とすれば、前からの脈絡からいえば「友人を愛さないか」という「理性」の問いに対しては「愛さない」と答えるべきではないか。しかるに予期に反して彼は「愛する」と答えている。それはいかなる根拠にもとづくのであるか。

彼はいう。魂を愛する私が *amans animam* どうして友人を愛さないでおれようか、と。これによって友人を愛する根拠が「魂を愛する」ことにあることが知られる。その根拠は次のように解されるであろう。私は神と魂とを愛する。友人は魂をもっている。ゆえに私は魂を有する者としての友人を愛する。

では「魂」とは何なのか。「理性」はそれについて次の質問を発する。「では汝は、蚤や虱を愛するのか」。この質問はいささか唐突にきこえる。しかし後につづく対話からその意味はあきらかになる。その意味はこうである。「アウグスティヌス」は友人を彼らが魂を有するがゆえに愛するといった。ここから一般に、「魂を有する者はすべて愛の対象になる」ということが結論される。ところで蚤や虱も魂 *anima* を有するもの、すなわち生物 *animalia* である。それゆえ愛されなければならない。これに対して彼は、「私は魂を愛するとはいったが、生物を愛するとはいわなかった」と答えている。魂 *anima* を、アリストテレスが定義したように、凡そ生きとし生ける者をして生ける者たらしめている生命の内在的根源の意味に解するかぎりにおいては、蚤や虱も魂を有するものであり、魂を有するものが愛されるとすれば、それらのものもまた愛の対象とならなければならない。しかしここで彼が「神と魂」というとき、その魂とはそのような生物学的概念としての魂ではなくて、特別の意味を有している。すなわち「理性的魂」*anima rationalis* としての魂を意味している。このような魂を有するのは、すべての生物のうちただ人間のみである。それゆえ彼が友人を魂を有するがゆえに愛するというとき、その意味は、彼らが生物なる

がゆえに愛するというのではなくて人間なるがゆえに愛するという  
ことであり、すなわち理性的魂を有する者なるがゆえに愛するという  
ことに外ならない。そしてこの理性的魂という点において人間は神  
との或る類似性を有し、「神と魂」というように神とともに愛の対  
象となりうるのである。

ここで「アウグスティヌス」の問題とする愛が、特に理性的魂と  
神とに対する愛を意味することに注意しなければならない。神と理  
性的魂とを有する者に共通する名称はペルソナ *persona* である。  
(ここではペルソナを神に固有な神のペルソナ *persona divina* の  
意味ではなく、ポエティウスによって「理性的本性を有する個  
体的実体」*substantia individualis rationalis naturae* と定義され  
たような広い意味にとる。) すると彼がここでいう愛とは、ペ  
ルソナルな者に対するペルソナルな愛であり、また「神と魂」と  
いわれる場合の魂は生物学的概念としてのそれではなくて、ペ  
ルソナルな愛の対象としてのペルソナルな魂であることが知ら  
れる。また神と魂とを知るといわれる場合の知も、神と魂とを  
何か自然学的ないし存在論的概念として把握することではなく  
て、ペルソナルな仕方であることが推察される。ここからして、  
求める神の知り方について、次の性格がとらえられる。神はわれ  
われが友人を知る場合のようなペルソナルな対象として知られる。

## 5

理 では、もし誰かが君に、君がアリピウスを知っているように、  
そのように神を知らせてやろうといったら、君は感謝して、十分  
ですというだろうか。

ア たしかに感謝はするでしょう。けれども十分です、とはい  
いませんね。

理 それはまたどうして？

ア たしかに私は、アリピウスを知っているような仕方  
で決して神を知ってはいませんが、そのアリピウスだ  
って十分には知っていないのですか

## ら。〔第3章8節〕

「アウグスティヌス」の求めている神の知り方がパーソナルな性格のものであり、その限りにおいてわれわれが理性的魂を有する人間としての友人を知る場合の知り方に共通することが分った。そこで問題となるのは、では神の知り方は友人を知る場合の知り方と全く同じであるかということである。そこで「理性」は彼に向って、「では汝がアリピウスを知っているように、それと同じ仕方で神が知られたならば満足か」と問うのである。

アリピウスは彼の親友である。彼はこの人をパーソナルな知をもって熟知していたにちがいない。では神はアリピウスを知るような仕方で知られるのであろうか。この「理性」の問いに対して彼は「否」と答えている。その理由は次のごとくである。たしかに彼はアリピウスをよく知っている。しかし完全にとはいえない。この友人の或る面は熟知されているが或る面は隠れているのである。それゆえこのような仕方で神を知ることは神についての無知を残しながら神の或る面を知ることであり、無知が残されているかぎり「神を知らんと欲す」という熱望は決して止むことがない。ゆえに彼は、「汝がアリピウスを知っているように、そのように神を知ることができたら十分か」という「理性」の問いに対しては「否」と答えるのである。

ではどうして彼は友人を完全に知ることができないのであろうか。この問題はのちに再びとり上げられる〔本論文第8章〕。さしあたり以上の考察からして、求める神の知り方について次の性格がとらえられる。神はパーソナルな対象として知られるが、その知られ方はわれわれが友人を知る場合のそれと同じではない。

## 6

理 では、神を十分に知りたいなど、厚かましいことはいわぬことだね。アリピウスさえ十分に知らないくせに。



ア そういう論理は成立しませんよ。たとえばですね。星に較べたら私の食事なんてごくつまらないことです。ところが、明日私がどういう食事をとるか私は知りませんが、明日、月がどういう形になるかは知っていると断言してはばからないのです。

理 では君は、明日、月がどのような形でまわるか、それを知っているように、そのような仕方でも神を知ることができたら十分か。

ア そうはいきませんね。というのは、月のことは感覚でたしかめられます。ところが神か、あるいは何か自然の隠れた原因によって、突然月の運行がかき乱されるようなことがないともかぎりません。そういうことが起ったとしたら、私が予測していたことはすべて偽となるでしょう。〔第3章8節〕

「アウグスティヌス」は親友アリピウスさえも知らないといった。これを受けて「理性」は、そのように身近かなものさえ知ることのできない者が、神を十分に知りたいなぞと望むのは厚かましいではないかという。この「理性」のことばのもとには、「卑近なものは高尚なものより知られやすい」ということが前提されている。しかし彼はこの前提そのものに反対する。たとえば食事は卑近なことであり天体の運行は高尚なことである。上の前提にしたがうならば、卑近な食事のことは高尚な天体のことよりもよりよく知られている筈である。ところが事実は反対である。私は明日どういふ食事をとるか知らない。しかし明日、月がどういう形になるかを確実に知っている。だから卑近のことの方が高尚なことよりもよく知られているという前提は成立たないのである。

ここで彼が対比させた卑近なことは「偶然的なこと」 *contingentia* を、高尚なことは「必然的なこと」 *necessaria* を意味している。卑近なことはわれわれの身近にたえず起っている日常的な出来事であって、それはわれわれに熟知されているように思われている。しかし案外知られてはい

ないのである。たとえば今夜私が何時に寝るか、明日どこで何を食べるか等のことは、断言できるほど明瞭には知られていない。勿論一応の予定を立てることはできよう。しかし予定はさまざまな偶然事によってくずされてゆくのである。これに対し、身近な生活から遠くへだたった高尚なこと、たとえば月の運行については、われわれは確実に未来に起る出来事を予言できる。それは、これらの出来事が一定の法則にしたがって進行している必然的なことがらに属するからである。

そこで、これに関連して「理性」はさらに、「では、月の運行について知られるような仕方で神について知りえたならば十分か」と問う。これに対して彼は「否」と答えている。その理由は次のごとくである。月の運行について確実に知りうるのはいかにしてであるか。われわれはまずそれがそうあることを感覚によってたしかめるのである。この夜には月の形はこのようであった。次の夜にはこのようであったということを経験によってたしかめ、その経験を記憶のうちにたくわえてゆく。かくて必然的なことがらについてのわれわれの認識の基礎をなすものは感覚的経験である。しかしながらいかに多くの経験を集めてみても経験の対象が全く無秩序に動いているとしたら、そこから何らかの必然的法則をみちびき出すことはできない。それができるのは、対象が或る一定の秩序を以て動いているからに外ならない。この事実にもとづいてわれわれは、月の進行に関する必然的法則を経験から引き出すことができる。またこの法則によって未来の或る時点における月の在り方を確実に予言することができるのである。

ところで「理性」が「月の進行を知るような仕方で神について知りえたならば十分か」と問うとき、その意味は、「月の進行と同じように神を必然的なものとして知りえたならば満足か」ということに外ならない。これに対して彼は「否」と答えている。その理由はまず第一に、月は感覚的経験の対象となるが神はならないということである。それゆえ感覚的経験から必然的な知をみちびき出すような仕方で神について何らかの必然的な知

をみちびき出すことはできないのである。第二の理由はより根源的なものである。上述のように、月の運動が必然的なものとしてとらえられる根底には、月の秩序的運動という事実があり、自然学者たちはこの事実に立脚して月の運行に関する理論を組み立てるのであるが、この月の運動の秩序そのものが何らかの原因を有している。それは神か、あるいは何か隠れた原因であり、天体はその原因によってこのように規則正しく動いているのである。それゆえ月の規則的運動は月自身の力によるものではなくて、むしろ天体を動かしている神ないし隠れた原因からこれを受けているのである。与えている者はまたこれを奪うこともできる。それゆえ神ないし隠れた原因によって天体はその規則正しい運動を一瞬にして止めることもまた可能である。そのようなことが起った場合には、われわれの有している天体の理論は一瞬にして無効となるであろう。なぜならその場合には、自然学者が前提している天体の秩序的運動という事実がもはや事実ではなくなるからである。

「アウグスティヌス」がここでいおうとするのは、経験によって知られる必然的なことがらは決して絶対の意味で必然的ではなく、その必然性そのものを神から受けているということである。しかるに神を知らんと欲すというとき彼は、神について絶対に必然的な真理を求めているのである。ゆえにこの意味においても彼は、「月の運行を知るような仕方では神を知りえたら十分か」という「理性」の問いに対しては「否」と答えざるをえなかったのである。以上、「必然的なもの」の知り方との比較においてわれわれは、いま求められている神の知り方について次の性格をとらえることができる。神は感覚的経験から必然的法則をみちびき出すような自然学的認識方法によって知られることはできない。

## 7

理 そうということが起りうると信ずるか。

ア 信じません。しかしいま私は、何を知るべきかをたずねているので

あって、何を信ずべきかをたずねているではありません。私たちは、自分の知っていることはすべて信じているといっても恐らく正しいでしょう。しかし信じていることをすべて知っているとはいえません。

理 では君はいまの場合、感覚による証拠はすべて斥けるのか。

ア 全然斥けます。〔第3章8節〕

いま彼は、「月の運行が神によってか、あるいは何か隠れた原因によって乱されるかも知れない」といった。それに対して「理性」は、「そういうことがじっさい起りうると信ずるか」*Credis hoc fieri posse?*と問うている。これに対して彼は「信じない」と答えている。彼は月の運行に関する必然的認識でさえも、いま求められている神の知にくらべれば不確定であるということを用いたために、「月の運動の秩序が神によって乱されるかも知れない」といったのであるが、しかしそのようなことが本当に起ると信ずるかと問われると、「信じない」と答える。ここで「信ずる」*credere* というのは、神を信ずるとか信仰するとかいわれる場合のような強い意味ではない。むしろ「思う」くらいの意味である。「神が宇宙の秩序を乱すようなことがあると思うか」と問われて「思わない」と答えているのである。何故思わないのかとさらにたずねられるとすれば（それはここでは問題とされていないが）、それに対しては色々の仕方で答えることができるであろう。しかし結局はデカルトが後にするように、神の善性とか誠実とかを最後のよりどころとするほかはないであろう。「アウグスティヌス」もそのようなことは起りえないと思っている。しかしそれは、あくまでもそう「思う」のであって絶対に「ない」と断言することはできない。なぜならわれわれに到底ありえないと思われることがらも、神の全能を以てすればあるかも知れないからである。それゆえこのようなことがらについては、「ありえないと思う」とはいえても、「絶対にない」と断言はできない。はっきり「ある」とか「ない」とか断言できるのは、絶対確実な認識にも

とづく場合のみである。そのような絶対確実な知を彼はここで「知」*scientia* と呼んでいるのである。

ところで感覚にもとづく知は、感覚にもとづくものであるかぎり、そのように絶対確実な知ではありえない。感覚によるかぎり、私にはそう見えるというより外はない。真実の知は感覚ではなく知性によってとらえられるのでなければならない。それゆえ「感覚による証明はすべて斥けるか」と問う「理性」に対して彼は、「全然斥けます」と答えるのである。

しかしここで感覚による証明が斥けられるのは、特に「いまの場合」*in hac causa* であるといわれていることに注意しなければならない。もし感覚による証明を「すべての場合」に斥けるならば、われわれは生活できない。われわれの日常生活は感覚の証明に対する信頼の上に成立っているからである。それゆえあらゆる場合に感覚の証明を斥けることは不可能である。彼がそれを斥けるというのは、特に「いまの場合」である。すなわち神を十分なる仕方では知ることが問題とされている場合である。以上の考察から、求める神の知り方について次の性格がとらえられる。神は単にそれについて何かを信ずるという仕方によってではなく絶対確実な認識によって知らなければならない。そのために神は感覚によらず純粋に知性によって知らなければならない。

## 8

理 ではどうだ。君がまだ知らないといった親友を、君は感覚によって知ろうとするのか。それとも知性によってか。

ア 友人について感覚によって知られることは、たとえ感覚によって何かが知られるとしてもどうせ大したことではありませんし、それだけで十分です。けれども彼が私にとってまさにそこにおいて友人である部分、つまり彼の精神そのものに、私は知性によって到達したいと願っているのです。

理 別の仕方ではだめか。

ア だめです。

理 では、きわめて親密な友人でも、君にとっては未知であると敢ていうのだね。

ア 勿論ですよ。じっさい私はあの友愛のおきてをきわめて正しいと考えていますがそれによると各人は自分の友を、自分自身を愛するより以下でも以上でもなく愛するようにと命じられています。ところが私はまだその自分自身をも知らないのです。……〔第3章8節〕

ここで再び友人を知る場合の問題にもどる。さきに彼は友人を知らないといった〔本論文第5章〕。これに対して「理性」は、友人を知らないというのはいかなる意味かという問題をふたたび提起する。友人を知るということを、もし感覚的に知るという意味にとるかぎり、久しく交わった友人はよく知られている筈である。しかし彼が、自分はまだアリピュスを知らないというとき、その場合の「知る」とはそのような感覚知を意味しない。それは友人の魂をまだ知らないということであり、魂を知るには感覚ではなく知性によらなければならない。勿論ここで彼は友人の魂を全然知らないといっているのではない。長年つき合った友人をただ感覚的にのみ知りその魂に関しては何も知らないということはある。彼がここでいうのは友人の魂を「十分に」知らないということである。すなわち、もはやそれ以上に知るを要しないほどに完全に知ってはいないということである。そして何故友人の魂のうちにそのように未知なるものが残っているかといえば、それは友人が私に対してその心の奥底を隠しているからではない。友人の魂に対する未知の原因は友人にあるのではなくてむしろ私自身にある。人間は他人の魂を知るのに自分の魂を以てし、自分の魂を知る度合に応じて他人の魂を知る。しかるに人間は自分の魂をまだ十分に知らない。人間にとっては自分の魂そのものが一つの謎なのである。

「神と魂とを知らんと欲す」というとき、彼は自分の魂を十分に、それ

以上何も知る必要がないほどあきらかに知ることを欲している。そのように完全に自分の魂を知ったときはじめて彼は友人の魂を完全に理解し、また完全に愛することができるであろう。しかし自分の魂が自分によって完全に知られるのは、神の光の中で自分の魂の全体が残りくまなくあらわに照らし出されるときである。それは神を十分に知るときである。魂を知るとは神を知ることを前提しそれなしにはありえない。以上の考察から、求める神の知り方の一つの性格がとらえられる。神が知られることによって魂が知られ、魂が知られることによって自己と友人とが完全に知られる。そのような知り方で神が知られるとき神は十分に知られている。

## 9

理 ……では、これに答えよ。もしもプラトンやプロティノスが神について語っていることが真であるとすれば、彼らが知っていたように神を知ることができたら君にとって十分か。

ア たとえ彼らのいっていることが真であるとしても、そこからただちに、彼らがそれらのことを知っていたということは帰結しません。じっさい、知らないことをしゃべりまくる人間も多いですからね。私自身、さきの祈りの中で述べたすべてのことを知りたいと申しましたが、もしそれらのことを既に知っていたとすれば、知りたいと思もしなかったでしょう。……私は祈りの中で、知性によってさとしたことを述べたのではなく、あちこちから寄せ集め記憶に委ねていることを述べたのです。それらのことがらに私はできるだけの信用を寄せています。しかし知るということはまた別問題です。〔第4章9節〕

ここで「理性」は、これまで考察されてきたものとは別の種類の知り方をもち出している。それは、プラトンやプロティノスが知っていたように知るという知り方である。そのような知り方で神が知られたら満足であろうか。彼は「否」と答えている。その理由はさしあたり次のように受けと

れる。たとえプラトンやプロティノスが真なることがらを語っているとしても、そこから直ちにそれを知っていたということは帰結しない。なぜなら誰かから伝え聞いた真なることがらを、みずからそれを知ることなしに語るということもありうるからである、と。しかし彼がここでいわんとするのは、プラトンやプロティノスが真なることがらを知らなかったということではない。彼らの名はここではただ例としてあげられているにすぎない。彼がここでいわんとするのは、真実を語る *dicere vera* ということと真実を知る *scire vera* ということとは別だということに外ならない。真実を語ることは、それを知ることなしにも可能なのである。われわれが古典を読んでそこから学んだことを人に語る時、われわれの語っているのは真実のことであろう。しかしそれを語っているわれわれ自身がそのことを知っているとはかぎらない。勿論、語る以上は何らかの仕方で知っている。しかし本当に知っているか否かは分らない。われわれは古典を読んでそこに記されていることがらを学ぶ。学ぶためには先哲の語ることがらが真実であるということが知られていなければならない。しかしそれはまだ確実に基礎づけられた知ではなく、信頼 *fides* にうらづけられた知である。われわれは読もうとする書物、教えを受けようとする教師に対していかほどの信頼を抱くことなしには、書物からも教師からも何も学ぶことができない。その意味でわれわれはプラトンやプロティノスのような先哲に対して大きな信頼を寄せている。そしてそこから多くの真実を学んでいる。しかしこのような仕方で「学ぶ」ということは、ここで彼が求めている知ではない。いま求められているのは、絶対の明証性を以てその真理をさることである。そのとき真理の証人はまさに自分の知性そのものであって、いかなる先哲の権威でもない。

以上から、求められている神の知り方についてその一つの性格をとらえることができる。神が十分に知られるときには、神に関することがらはいかなる先人の権威に対する信頼にもよらず、まさに自分自身の知性によ



てその眞理性が明証的に知られる。

## 10

理 ではどうだ。すくなくとも君は幾何学において、線とは何であるかを知っているか。

ア それは、はっきり知っています。

理 そんなにはっきり言明して、アカデミア派がこわくはないか。

ア ちっともこわくありません。彼らは、智者はあやまちを犯すべきではないといいました。私はしかし智者ではありません。ですから今までのところでは、自分の知っていることがらは知っていると言明してはばからないのです。……〔第4章9節〕

神を十分に知るという場合の知り方が感覚によるものではなく、また誰か権威ある人の説を信頼を以て受けとることでもなく、自分の知性によって明証的に知ることであると上にいわれた〔本論文前章〕。次に問題になるのは、そのような種類の知をわれわれは何らかの対象についてもつことができるかということである。「理性」はいま、幾何学に関する知をもち出して、それが果してそのような種類の知であるか否かの吟味を彼に迫るのである。

「理性」は問う。「汝は幾何学において、線とは何であるかを知っているか」と。これに対して彼は、「はっきりと知っている」 *plane scio.* と断言する。すなわち、幾何学の定義に関するかぎり、彼は知性によってとらえられ、絶対に疑いえない明証知を有しているのである。だからこのような知に関するかぎり、彼は求める神の十分なる知り方に共通する知り方を既に有している。もっともそれが神の知り方と全く同じであるか否かはこれから検討を要する問題であるが、すくなくとも彼は幾何学における線の定義に関しては明証的な知を有していると断言する。

しかしこれに対して「理性」は、「そのように断言してアカデミア派が

こわくはないか」と反問する。ここで「アカデミア派」というのは、アルケシラウス、カルネアデス、フィロン等、いわゆる新アカデミア派の人々をさす。彼らは、人間はこの世においては何一つ確実なことを知りえないと主張し、一切のことがらについていかなる断言的な判断をもさしひかえるのが智者の道であると説いた。アウグスティヌスが一時、この学派の説に傾いたことは彼自身その『告白』において述べるごとくである〔第5巻14章25節〕。しかし回心後カシキアムで書いた最初の著作『アカデミア派駁論』において彼はこの派の懐疑論を論駁した。そして何も知らないと称する智者たちも、少くとも自分自身が生きていることを知らないとはいえまい、だから自分が生きている、存在している等のことは絶対に真であると断言しうるといい、この世において既にわれわれは絶対に疑いえない知を有しうることを証明した〔第3巻9章19節〕。

さて『ソリロキア』はカシキアム滞在の末期に書かれたものであり、そこには既に懐疑論を克服した者の自信と余裕とが感ぜられるのである。かつて対決すべき第一の論敵であったアカデミア派を、いま彼は少しも恐れぬ。そのことを彼はこの派に対する皮肉をまじえて表現する。曰く。アカデミア派の智者は何事をも真として断言することをいとう。しかし自分はまだ智者ではないから、自分の知っていることがらについては「知」*scientia* を有していると公言してはばからない、と。

かくて、「十分に神を知る」という知り方がいかなる知り方であるかを追求してきたわれわれは、ここで遂にこの世において持つことができ、また求める神の知り方に最も近い知り方に到達したのである。それは幾何学の知である。ではわれわれは幾何学の定義を知るような仕方で神を知れば満足なのであるか。そもそも幾何学に関する知はいかなる仕方で知られ、またそこでは何が知られるのであるか。これが次に問われるべき問題となる。

## 11

理 ……では、始めにもどってたずねるが、君は線について知っている

ように、スファイラと呼ばれる球のことも知っているか。

ア 知っています。

理 どちらも同じ程度にか。それとも、いずれか一方を他方よりも多く、あるいは少く知っているか。

ア 勿論、同じ程度です。いずれの場合もあやまつことはありませんから。

理 では君はそれらのことを、感覚でみとめたのか、それとも知性で。

ア いや、こういうことがらについては、感覚はちょうど船のようなものであることを経験しました。というのは、感覚によって志す地まで運ばれると、そこで私は感覚をすてたのです。そして上陸したときのように、思惟をめぐらしてそれらのことについて考え始めたのですが、しばらくの間足がぐらついていました。ですから幾何学を感覚で認識するよりはむしろ船で地上に行く方が速いと思われるほどです。もっとも感覚も初学者にはいくらか助けになるようですが。

理 ではそれらのことがらについての学は、もし何かそういったものを君が持っているとして、知と呼ばれることを疑わないか。

ア 疑いません。……〔第4章9節〕

「アウグスティヌス」はさきに、線についての絶対に確実な知を有しているといった〔本論文前章〕。「理性」はさらに問う。球についての確実な知を有しているか、と。これに対して彼は「然り」と答えている。ところで線についての知と球についての知とは、或る意味で異り或る意味で同じである。すなわち一方が「線の」知であり他方が「球の」知であるかぎりにおいて、対象的に異なる。にもかかわらずこの二つの知はいずれ劣らぬ程度に確実で疑いえない明証知であるかぎりにおいて同じ知に属しているのである。

ところでこのような知を、われわれはどこから、何によって、いかにし

て得るのであろうか。感覚によってか、それとも知性によってであるか。この「理性」の問いに対して彼は、面白い比喩を用いて答えている。この知に到達するために感覚は船の役割を演じている。船は海を渡って岸にまで運ぶが、そこで船のつとめは終る。上陸するや人は、自分の足で歩き始めなければならない。求めるものは陸地にあるのだから、自分の足で探さなければならない。しかし上陸の当座人の足は、しばらくの間はぐらついて定まらないのである。

この比喩において海は可感的世界を、陸は可知的世界を意味している。可感的世界を渡るには感覚を必要とする。それによって人は可知的世界に到達する。求める真理は可知的世界にある。それを発見するために人は自分の足で、すなわち知性によって進まなければならない。しかし可感的世界になれた知性は、可知的世界の探究のはじめによるめくのである。

幾何学においてとりあつかわれる線や球は可感的世界に存在する線や球とは、本質的に異なるものである。幾何学の線や球は可感的世界には絶対に存在しない。それは知性によってとらえられるもの、つまり「可知的なもの」*intelligibile* としてのみ存在する。にもかかわらずそれは、感覚のたすけなしには知られえない。いかに偉大な幾何学者といえども図形をえがくことなしに研究をすすめることはできない。しかし感覚的経験をいくら蓄積してもそこから幾何学の知は生じない。幾何学は実証的経験科学ではない。さきに考察された月の運行に関する学においても幾何学が用いられる。しかし月の運行に関する学は、それ自体としては幾何学ではない。月の運行が一定の秩序にしたがって行われているという認識は純粹に可知的な真理ではなくて、久しい人類の経験によって実証された経験的事実である。この事実にもとづいて未来の或る時点における月の位置や形状が測定され、その計算に幾何学の原理が適用されうるが、しかしかかる原理の適用の根拠となっている月の秩序的運動という前提それ自体が感覚的経験にもとづいているのである〔本論文第6章〕。

かくて月の運行に関する学と幾何学とは、いずれも感覚を手がかりとし、また必然的な知を探究する点において共通するが、しかし両者における感覚の役割は本質的に異なる。すなわち前者においては、その推論の過程に幾何学が重要な役割を演じながらも感覚的経験がこの学の土台をなしているのに対し、後者においては感覚的経験は必須の役割を演ずるがその役割はあくまでも補助的なものにすぎず、主役を演ずるのは知性であり、そこでえられる結論は知性によって明証的に把握される真理である。「アウグスティヌス」が、月の運行に関する学に対しては拒否した、真の知としての性格を幾何学に対しては容認する理由はここにある。

## 12

理 ではどうだ。線と球。これは何か一つのものであると君に思われるか。それとも異なるものだろうか。

ア 大いにちがいます。誰にだって分りますよ。

理 しかし、もし君が線も球も等しい程度に知っていて、しかも両者は君も認める通り大いにちがうとすれば、異なるものについての何ら異らぬ知というものがあるわけだね。

ア 勿論その通りですよ。

理 ちょっと前、君は何といった。さっき君に、十分といえるように知るために、どのような仕方で神を知ろうと欲するかとたずねたとき、君はこう答えたではないか。神を認識したいと思うその仕方に似た仕方でまだ何も認識していないから、それについて説明することはできないとね。ところがいま何という。線と球とは似たようなものなのか。

ア 誰がそんなことをいうものですか。

理 しかし私がたずねたのは、神に似たものを何か知っているかということではない。君がその仕方で神を知りたいと熱望しているそのような仕方で何か知っているものがあるかということなのだ。じっさい君は神を知ると同じ仕方で線を知っている。しかし線と神とはそれぞれ別の在り方を

している。だから答えたまえ。あの幾何学の球を知るような仕方で神を知ることができたならば十分か。つまり、幾何学の知について何の疑いもないように神についても何の疑いもないような仕方で知りえたならば十分なのか。〔第4章10節〕

線と球とは対象としては異なるものである。しかし線についての知と球についての知とは、いずれも明証的な知であり、その明証性の度合において全く同じ程度であるという点において、同じ幾何学の知に属している。つまり、線についての知と球についての知とは、その対象に関してではなくまさにその「知り方」において全く同じ知である。

われわれはこの探究の始めにおいて「理性」が「アウグスティヌス」に向って、「どのような仕方で神を知ることができたら十分か」と問うのをみた。それに対して彼は、神を知りたいと思うその知り方でまだ何も知っていないからその問いに対しては答えられないといったのである〔本論文第2章〕。しかし今、その答の端緒がひらかれたように思われる。勿論まだ神を十分に知らない彼にとっては、神の知り方がいかなるものであるかを答えることはできない。しかしたとえ対象は異なるにしても、その対象の「知り方」が共通であるがゆえに相互に比較することができ、また同一の知の部類に包含することのできる場合のあることを、いまわれわれは線と球という異なる対象についての知が同じ幾何学の知に属するという例から知りえたのである。ところで今、神について求められているのも、絶対に確実な明証知である。とすればここに、「どのような仕方で神を知りえたならば十分か」という問いに対して、求める神の知り方に比較して論ぜられる場合がここに一つ見出されたことになる。それは幾何学における知り方である。そこで「理性」は彼に向って問うのである。幾何学において知られる場合のような明証知を以て神を知りえたならば汝は満足であるか、と。

## 13

ア お待ち下さい。あなたはひどくせき立てて私を説得しようとなさいますが、私はしかし、これらのものを知るような仕方では神を知りたいと思うなどとは到底いうことができません。というのは、そのもの自体として似ていないばかりでなく、それについての知も似てはいないと思われるからです。第一に、線と球とは相互に異なるものだとはいっても、しかしそれらについての知識が一つの学問のうちに包みきれないほどには異っていません。ところがいかなる幾何学者といえども、自分は神を教えるなどと公言する者はないでしょう。第二に、もし神についての知とそれらのものについての知とが等しいとすれば、私はそれらのものを知ることによって、神を知ったらよろこぶであろうと推察する同じ程度のよろこびを感じることでしょう。ところがいま、私はこれらのものを神に較べて全く軽んじていますから、ときどき思うのです。もし神を認識できたならば、およそ見られうるその仕方では神を見ることができたならば、これらすべてのものは私の頭から消え失せるであろうと。〔第5章11節〕

幾何学において線や球について知ると同じ仕方では神を知りえたならば満足かと問う「理性」に対して彼は「否」と答えている。その理由は二つある。一つは、幾何学の知と神の知とは、その対象において非常に異なるということである。なるほど幾何学においてとりあつかわれる諸々の対象は、たとえば線と球とは、対象的に異っている。しかしそこには共通性があり、その共通性のゆえに一つの学のうちに包含されうる。それゆえ同一の幾何学者が、線についても球についても語り、教えることができるのである。ところが神は、線や球とは余りにも異なる。だから神についての明証的な知を（そのような知を神について持ちえたとしてのことであるが）、その明証性のゆえに幾何学のうちに含まして神についての幾何学を造り、幾何学者が線や球について語るように神について語るということは不可能であ

る。(のちにスピノザはそれを試みる。しかしそれはもはやアウグスティヌスの神ではない)。このように線と球とはたとえ対象的に異なるにしても同じ仕方で知られ、同じ幾何学の中に含まれる程度の共通性を有しているが、神は対象的に同じ幾何学の中に包含されえない仕方で異なるがゆえに、「線や球を知ると同じ仕方で神を知れば満足か」という「理性」の問いに對しては、「否」と答えるのである。

第二の理由は次のごとくである。もし神を十分な仕方で知ることができたならば、そのときわれわれは大きな喜びを感じるにちがいない。ところが線や球について何らかの真理を知りえたとしても、そのような喜びは感ぜられない。それゆえ同じ明証的な知であるとしても、その知が喜びをとともなうか否かという点で、両者はその知り方においても異るといわなければならない。

しかしこれに対しては次の疑問が提起されるかもしれない。たしかに神の知が大きな喜びをとともなうことは認めるとしても、幾何学の知が何の喜びをもとともなわぬとはいえない。いや幾何学の知もそれを探究する者に少なからぬ喜びを与えるのではなからうか。素晴らしい定理を発見した幾何学者は天にも昇るような喜びを味うのではなからうか。おそらくアウグスティヌスもそれを否定はしないであろう。問題はその喜びの質にある。たしかに新しい定理を発見した幾何学者は大いに喜ぶであろう。しかしそれは、愛する友に出会ったときの喜びとは異なるものである。ここで「アウグスティヌス」が神の知にとともなう喜びというのは、生ける神に直接に對面する者の味わう喜びである。つまりパーソナルな喜びである。かくてわれわれは、幾何学的な知り方との比較において、求める神の知り方について次の性格をとらえることができる。神が十分に知られるとき、その知には最高度のパーソナルな喜びがともなう。

以上、われわれは「神と魂とを知らんと欲す」といわれる場合のその



「知り方」とはいかなる知り方であるかを、「理性」と「アウグスティヌス」との対話に即して追求してきたのである。いまそれを要約し、この問題について知りえた点をあきらかにしたいと思う。

神の知り方がいかなるものであるかを追求するために、『ソリロキア』においては「理性」がいくつかの知り方を彼の前に提示し、それらを彼の求めている知り方と比較するという方法がとられている。しかも求める神を知ると同じ仕方でまだ何も知らない彼にとっては、「理性」の提示するいずれの知り方も不満足であり、求める知り方はそのいずれでもないという仕方で排除されてゆく。いわば否定の道 *via negativa* によって求める知り方の性格は規定されてゆくのである。では求める神の知り方は提示されたそれらの知り方とどの点で異なるか。そういう観点から提示された知り方の各々を簡単に見てゆこう。

(1) 友人を知る場合の知り方。われわれは友人の魂をまだ十分に知らない。友人の魂を知るためにはまず自分の魂を知らなければならない。自分の魂もまだ十分に知られていない。われわれは、それにおいて魂が十分に知られ、したがってまた友人も十分に知られることになるような神の知を求めているのである。ゆえに求める神の知り方は友人の知り方と同じではありえない。

(2) 天体の運行を知る場合の知り方。この知は感覚的経験に依存しており、またこの知の必然性の根拠たる天体の秩序そのものが神に依存している。しかるにいま求められているのは、このような秩序の原因である神についての純粹に知性的な認識である。ゆえに求める神の知り方は天体の運行に関する知のそれと同じではありえない。

(3) プラトンやプロティノスの著作を通じて神について知る場合の知り方。これらの著作を通じて知られる真実は、これらの著者のことばの真実性に対する信頼にうらづけられている。しかるにいま求められているのは神についての直接的明証知である。ゆえに求める神の知り方はこの知り方

と同じではありえない。

(4) 幾何学の真理を知る場合の知り方。この知には、神を十分に知ったときに生ずべき大なるパーソナルな喜びがともなわない。ゆえに同じではありえない。

しかしながら上記の四つの知り方は、求める神の知り方と全然異るのではなく、何らかの共通性を有している。その共通性に着眼すると、これらの知り方との比較において、いわば類似の道 *via similitudinis* によって、求める神の知り方について或る性格をとらえることができる。そのような観点からあらためて四つの知り方を吟味してみると、

(1) 友人を知る場合の知り方は、パーソナルな愛をとまなうパーソナルな知り方である点において、求める神の知り方に共通する。

(2) 天体の運行を知る場合の知り方は、或る限定された条件のもとにおいてにせよ、対象の必然的な知である点において、絶対に必然的な神の知に共通する。

(3) プラトンやプロティノスの著作を通して神を知る場合の知り方は、彼らが神について真実を語っているかぎりにおいて、絶対に真実の知である神の知に共通する。

(4) 幾何学における知り方は、対象の明証的な知であるかぎりにおいて、明証そのものなる神の直観と共通する。

このようにしてとらえられた求める神の知り方のうちには、(1)パーソナルな対象に向うパーソナルな知であるということ、(2)明証的な知であるということが、二つの根本的条件として含まれている。われわれはこの世においては、この二つの条件を兼ねそなえた神の知をもつことができない。否、一般的にいかなる対象についても、この条件を兼ねそなえた知をもつことができない。友人に対する知はパーソナルであるが完全に明証的でなく、その暗さをわれわれは友人に対する信頼でもっておぎなわなければならない。幾何学の知は明証的であるがその知にはパーソナルな

愛がともなわない。アウグスティヌスは完全にペルソナルであってしかも完全に明証的な知を求めている。そのような知にいたるまでは「十分です」ということができない。しかしそのような知はこの世ではもつことができない。ただ「かのときに」、すなわち神を「顔と顔とを合わせて」みる終末の visio において、この望みは達成されるであろう（『コリント前書』第13章12節）。それまでは忍耐を以てこれを待たなければならない。

アウグスティヌスはそのことをよく知っていた。よく知った上でこの世においてなしうるかぎりの神の知を求めようとした。われわれは彼の神学のうちにペルソナルな知と明証的な知に対する彼のあくなき希求を見出すのである。この二つの希求はこの世においては同時に満足されることができないばかりか、相互に矛盾するようにさえ思われる。それは彼の神探究を内から動かしている矛盾せる二つのモメントである。この矛盾せるモメントのゆえに彼の思想は時に難解である。しかしまたこの矛盾せるモメントのゆえに彼の神学には独自の生命が躍動しているのである。